

D-5 児童の心身発達と乳児期の栄養法との関係とその環境条件について(第9報) (5) 始歩期と乳児期の栄養法と知能発達及び体格との関係  
宮崎大教育 ○ 秋山露子 清家光子

目的 1960年以来児童の心身発達と乳児期の栄養法との関係とその環境条件について研究を進めて来たが、児童の心身発達は生後6ヶ月以内の栄養法及びその他の環境条件についても無関係ではない事が段々明らかになって来た。今回は始歩期と乳児期の栄養法と知能発達との関係及び体格との関係についても検討を試みた。

方法 中学生A群335名B群226名、合計561名を対象に知能発達検査及び質問紙により、乳児期の栄養法及びその他の環境条件について調査し、母集団の分散の均一性についてはF検定を行い、平均の差をt検定又はF検定を用いて検討を行った。

結果 始歩期は11ヶ月以前、12~14ヶ月、14ヶ月以後の三つに分類した。平均知能偏差値は11ヶ月以前が最も高く、始歩期が早い程知能発達が良く、14ヶ月以後では特に知能発達が遅れている者が多い事が明らかとなった。乳児期の栄養法別では何れの栄養法においても同様は始歩期の早い者程知能発達が良い傾向がみられるが、特に14ヶ月以降、始歩期の遅れた者は $P < .05$ 又は $P < .01$ で有意の差が認められ、ISS(60≦)とISS(50>)との間で始歩期11ヶ月、12~14ヶ月、14ヶ月以降の間は $P < .005$   $\chi^2 = 18.789$ で著しい有意差が認められた。又体格の如くはかわらぬ11ヶ月、12ヶ月~14ヶ月、14ヶ月以後の順に始歩期が早い程平均知能偏差値が高く、始歩期と体格及び知能発達との関係は平均知能偏差値は都市と地方では逆の関係にあり都市はI型、地方はII型が最も高い知能偏差値を示したが乳児期の栄養法では混合栄養群が最も優れ、母乳、人工栄養群が順でISS(60≦)とISS(50>)及び体格IとII型との関係はF検定で $P < .005$   $\chi^2 = 13.333$ で有意な関係が認められた。